教育実習生からみた「最近の子ども」

柳田　優子*・大石　英史

Today's Children from the Viewpoint of Student Teachers.

YANAGITA Yuko and OHISHI Eiji

(Received July 30, 2004)

キーワード：教育実習生、今の子ども、子どもの変化

【問題と目的】

「最近の子どもは良く分からない」という言葉を口にしたことのある人は多いだろう。メディアの中で、また世間話の中で使われることは多い。この言葉には、自分よりも若い世代の行動の不可解さを批判的に述べようとする意図が含まれている。携帯電話の過剰な使用、人前での化粧、敬語を用いない話し方などが、この言葉の矛先となる。

「最近の子どもはよく分からない」「最近の子どもは変わった」という認識について、門脇（1999）は、1980年頃（昭和55年頃）から特にその傾向が強まったと述べている。また、そのような傾向の契機として、1980年の金属バット両親惨殺事件、1983年の横浜浮浪者暴行事件があったことを指摘している。前者は、経済的に裕福な中流家庭の子どもが起こした事件である点が人々の驚きを呼び、後者は、逮捕後の少年による「汚物を処理してあげた」という発言が衝撃を与えたという。このような子どもの姿から、大人達は子どもへの疑念を膨らませ、「最近の子どもは良く分からない（何を考えているのか分からない）」といった言葉を流行させるに至ったというのである。

以後、現代の子どもを説明するための様々な試みがなされてきた。門脇（1999）は、現代の子どもの変化として、初語の遅れと発育の乱れ、活動量の低下がもたらす無気力化、「フツーの子」の自閉症児化、人間嫌いの広がりなどを挙げ、それらを「社会力の欠如」という観点から考察している。また、榎本（2001）は、現代の子どもの変化を「自己チューな子」の増加として捉え、現在の文化的状況と照らし合わせた考察を行っている。

しかし、実際に子どもは変化しているのだろうか。また、変化したとするならば、それはどのような変化なのだろうか。2004年4月3日に掲載された朝日新聞の記事によると、「いまどきの若い者は（よく分からない）」と述べたことがある人は、全体（3234人）の47%にのぼるという。また、「いまどきの若い者は（よく分からない）」と感じた具体的な内容については、「自分のことしか考えない」、「責任感がない」、「指示待ちが多い」、「こらえ性がない」「努力しない」「口ばかりで動かない」などが上位のものとして挙げられた。ただし、「いまどきの若い者は（よくわからない）」と述べたことがない人も53%を占めており、その理由として、「自分の若い時も上の世代から同じことを言われた。いつの時代

*山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専修

もいわれる言葉」であることを挙げている。つまり、「いまどきの若者は（よく分からない)」という言葉は、若者の行動の如何に関わらず、上の世代が下の世代を表現する言葉として普遍的に用いられている可能性があるのである。世代を経ることで変わった特徴も確かにあるが、埋めがたい世代間のギャップを批判的な言葉をもって表現したに過ぎないようにも思われる。

そこで、本研究では、大学生の教育実習生が自分よりも下の世代を見たときに、どのような印象を持ち、どのような点が自分の頃と変わったと感じるのかを明らかし、現代の子どもの変化について検討を行った。

【方法】

調査対象者：国立Ａ大学教育学部３、４年生のうち、H14年度、H15年度、H16年度に教育実習に参加した学生（男113名、女185名　計298名）を調査対象者とした。なお、調査対象者の大半が、Ａ県の大学附属小・中学校を実習先としていた。

調査期間：教育実習直後の2002年７月、2003年７月、2004年７月に調査を行った。

調査手続き：質問紙を用いた調査を行った。質問紙はＡ4サイズの紙1枚で、「教育実習で実際に子どもと関わる中で、自分が同じ年齢だった頃と違う（変わった）と感じた行動傾向や特徴を、具体例を挙げながら簡潔にまとめなさい。」という質問に対し、自由記述で回答を求める形式であった。質問紙は教育実習に参加する学生全員が履修する「教育相談・進路指導」の講義の中でレポート課題として与えられ、１週間後に回収された。

【結果】

１．調査対象者の担当学年と担当学校の内訳

調査対象者の担当学年と担当学校の内訳をTable１とTable２に示した。本調査における調査対象者の場合、小学校では、小学２年、小学4年、小学6年を担当した学生が多く、中学校では中学1年を担当した学生が多く回答していた。なお、今回得られた結果においては学校別で記述に差が見られなかったため、学校による差は考慮しないものとした。ただし、実習先が大学附属小・中学校である学生の割合が多く、その他の学校との比較を行うことはできなかった。よって、今回の調査では、大学附属小・中学校に特有の傾向が抽出された可能性もある。

Table１　調査対象者の担当学年と担当学校の内訳（人）（小学校）

担当学年	附属Ａ小学校			附属Ｂ小学校			その他の小学校		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
小学１年	0	0	0	5	9	14	0	1	1
小学２年	9	20	29	3	12	15	0	2	2
小学３年	0	1	1	6	10	16	0	0	0
小学４年	17	14	31	7	7	14	1	2	3
小学５年	0	0	0	7	7	14	0	0	0
小学６年	15	16	31	10	7	17	0	2	2

Table 2　調査対象者の担当学年と担当学校の内訳（人）（中学校）

担当学年	附属C中学校			附属D中学校			その他の小学校		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
中学１年	7	17	24	4	13	17	2	2	4
中学２年	8	11	19	3	4	7	0	0	0
中学３年	7	16	23	2	11	13	0	1	1

２．子どもの変化の内容

得られた回答を簡潔にまとめ、KJ法により大まかに分類した。その結果、変化の内容は、「対人関係に関するもの」「給食（食習慣）に関するもの」「学習・授業に関するもの」「個人特性に関するもの」「言葉遣いに関するもの」「遊びに関するもの」「その他」の７項目に分類された。

変化の内容に関して、近接する学年間で大きな差は見られなかった。そこで、小学1年から小学4年まで、小学5年・6年、中学1年から中学3年までを各まとまりとして捉え、変化の内容について検討することとした。なお、小学４年と小学5年を区別したのは、近年の子どもの発達的特徴を踏まえてのことである。現在、学校における大きな問題に不登校問題があるが、小学4年と小学5年を境に不登校生徒の数が増大することが明らかとなっている。また、女子を中心とするグループ化現象など仲間関係に変化が見られるのもこの時期である。さらに、小学4年・5年の間にある10歳という壁は、ピアジェのいう形式的操作期から具体的操作期への移行時期であり、様々な抽象的思考活動が可能となり、知的成熟という意味でも大きな変化がある時期であると捉えられる。これらの理由により、本調査では小学4年と5年の間を1つの境目として、分類を行った。

（１）各変化の内容における回答者数

各変化の内容における回答者数をTable3に示した。なお、Table3には、複数回答を含めたのべ項目数を記している。学年別に見ると、小学１年から4年においては、「学習・授業」に関して挙げられた変化が多く、次いで「個人特性」が多かった。小学5年・６年においては、「その他」に分類されるものが最も多く、次いで「個人特性」「給食（食習慣）」が多かった。中学1年から3年においては、「学習・授業」に関して挙げられた変化が最も多く、次いで「その他」「個人特性」が多かった。

Table3　各変化の内容における回答者数

	回答者数（%）		
	小学1年から4年	小学５年・６年	中学１年から3年
対人関係	40 (31.7)	20 (2.5)	24 (22.2)
給食（食習慣）	47 (37.3)	28 (43.8)	6 (5.6)
学習・授業	114 (90.5)	25 (39.1)	70 (64.8)
個人特性	70 (55.6)	32 (50.0)	49 (45.4)
言葉遣い	8 (6.3)	7 (10.9)	13 (12.0)
遊び	27 (21.4)	9 (14.1)	2 (1.9)
その他	65 (51.6)	43 (67.2)	13 (12.0)

Table4　「変化はない」と答えた調査対象者の数

	回答者数（%）		
	小学1年から4年	小学５年・６年	中学１年から3年
「変化はない」	20（15.9）	7（10.9）	31（28.7）

（２）学年別に見た変化の内容

各学年を担当した学生達によって挙げられた変化の内容のうち、主なものをTable5に示した。なお、「何も変わっていない」「変わったところはない」と回答した者の人数については、Table4に示している。

①小学１年から小学４年

「対人関係」に関して、「男女仲が悪い」「男女仲が良い」「グループがない」などが多く挙げられた。また、「給食（食習慣）」に関しては、「給食を平気で残す」「食が細い」「好き嫌いが多い」などが挙げられた。「学習・授業」に関しては「習い事が多い」「授業中に立ち歩く子どもが多い」「授業中に疲れて眠っている」などが挙げられた。「個人特性」に関しては、「幼い」「自己主張が強い」「自己中心的（マイペース）」などが挙げられた。「言葉遣い」に関しては、「言葉遣いが悪い」「敬語を使わない」などが挙げられた。さらに「遊び」に関しては「PC（パーソナル・コンピューター）、ゲーム遊びの増加」「室内遊びの増加」「一人遊びの増加」「塾や習い事で遊ぶ暇がない」などが挙げられた。「その他」に関しては、「メディアの影響が大きい（アイドルの真似や流行など）」「教師と生徒の距離が近い」「掃除が下手」「生活のリズムが不規則」などが挙げられた。

②小学5年・小学６年

「対人関係」に関して、「男女仲が良い」「女子が強く、男子がやさしい」などが挙げられた。「給食（食習慣）」に関しては、「給食を平気で残す」「小食」「好き嫌いが多い」などが挙げられた。「学習・授業」に関しては、「塾・習い事が多い」「授業中に立ち歩く」などが挙げられた。「個人特性」に関しては、「自己主張がはっきりできる」「大人っぽい」「幼い」「反抗しない、素直」などが挙げられた。「言葉遣い」に関しては、「言葉遣いが悪い」が挙げられた。「遊び」に関しては、「ゲーム・芸能人に対する関心が高い」などが挙げられた。「その他」に関しては、「メール・PC、携帯電話電話を使いこなす」「掃除をしない、下手」「流行に敏感、流行を追う」「保健室利用が多い」などが挙げられた。

③中学１年から３年

「対人関係」に関して、「周囲に無関心」「グループ化」「人間関係が希薄」などが挙げられた。「給食（食習慣）」に関しては、「小食」「食事中の会話がない」が挙げられた。「学習・授業」に関しては、「塾通いの増加」「挙手が多い」「知識が豊富」「居眠りが多い」「やる気がない」などが挙げられた。「個人特性」に関しては、「大人びている（特に女子）」「幼い」「真面目」などが挙げられた。「言葉遣い」に関しては、「挨拶をよくする」「「難しい・大人びた言葉を使う」「流行の言葉や略を使う」「敬語が使えない」などが挙げられた。「遊び」については、何も挙げられていなかった。「その他」に関しては、「メールアドレス＝友だちという認識」、「周囲に無関心」「グループ化」などが挙げられていた。

Table5　主な変化の内容　　（　）内は人数

	変化の内容		
	小学１年から４年	小学５年・６年	中学１年から３年
対人関係に関するもの	・男女仲がよい（6） ・男女仲が悪い（4） ・グループがない（4） ・縦のつながり(学年)が弱い(3) ・グループに分かれる（3） ・リーダーがいない（3） ・友人関係が広く浅い、複雑(2) ・喧嘩が少ない（2） ・喧嘩が多い（2） ・集団行動が苦手（2）	・男女仲がよい（3） ・女子が強く、男子はやさしい（3） ・喧嘩が少ない（2）	・周囲に無関心（2） ・グループ化（2） ・人間関係が希薄（2） ・リーダーシップを取れる(2) ・協力しあっている（2）
給食（食習慣）に関するもの	・給食を平気で残す（36） ・少食（4） ・好き嫌いが多い（4）	・給食を平気で残す（14） ・少食（6） ・好き嫌いが多い（5）	・少食（2） ・食事中の会話がない（2）
学習・授業に関するもの	・習い事が多い（26） ・授業中に立ち歩く（16） ・授業中に疲れている、寝る(6) ・積極的に挙手する（5） ・集中力がない（4） ・学習の個人間格差が大きい(3) ・特定分野について物知り(3) ・不器用（図画、技術等）(3) ・集団より個人の欲求を優先(それぞれが発言し、まとまらない、人の話を聴かない等)(3) ・勉強への意欲が高い（3）	・習い事・塾が多い（5） ・授業中に立ち歩く（2） ・集中力がない（2）	・塾通いの増加（22） ・挙手が多い（4） ・知識が豊富（3） ・居眠りが多い（3） ・やる気がない（3） ・不器用（のこぎり、マッチが使えない、等）(3) ・時間前に着席できる（3） ・勉強、成績に神経質（3）

個人特性に関するもの	・幼い（抱きつく、床に寝転ぶ、等）(12) ・自己主張が強い（7） ・自己中心的（マイペース）(5) ・大人びている（5） ・体力がない（5） ・感情が表に出にくい（5） ・素直で純粋（3） ・自己主張の手段として暴力に訴える（3） ・自分の行動を抑制できない（落ち着かない）（3） ・わがまま（3） ・コミュニケーションが下手(3)	・自己主張がはっきりできる(3) ・反抗しない、素直（3） ・大人っぽい（3） ・幼い（3） ・人懐っこい（2） ・態度がよい、おちついている（2） ・思いやりがある、気を遣う(2)	・大人びている（特に女子）(8) ・幼い（5） ・真面目（5） ・自己主張ができる（3） ・体力の低下（3） ・純粋、素直（3）
言葉遣いに関するもの	・言葉遣いが悪い（うざい、死ね、きもい、まじ、むかつく、等）（5） ・敬語を使わない（2）	・言葉遣いが悪い（6）	・挨拶をよくする（4） ・難しい言葉を使う、大人びた言葉を使う（3） ・言葉遣いが悪い（2） ・流行の言葉や略を使う（2） ・敬語が使えない（2）
遊びに関するもの	・PC、ゲーム遊びの増加(12) ・室内で遊ぶ（4） ・1人遊びが増加（3） ・放課後（塾などで）遊ぶ暇がない（3）	・遊び、ゲーム、芸能人に対する関心が高い（2）	・室内で遊ぶ（1） ・忙しくて遊べない（1）
その他	・メディアの影響（アイドルの真似、流行、等）（8） ・PC、ゲームに詳しい（5） ・生活リズムが不規則（就寝時間が遅い）（4） ・教師と生徒の距離が近い(4) ・掃除が下手（4） ・体格に差がある、体が小さい（4） ・しつけがされていない（3） ・親の文句が多い（過保護）(3)	・メール、PC、携帯電話を使いこなす（12） ・掃除をしない、下手（7） ・流行に敏感、流行を追う(4) ・保健室利用が多い（4） ・生活のリズムが不規則（3）	・携帯電話、PC、メールを使いこなす（26） ・不登校が多い（6） ・上下関係という意識がない(3) ・掃除をしない（3） ・時間に追われている（3）

【考察】

1．子どもの変化について

（1）小学1年から4年

小学1年から4年生を担当した教育実習生によって、最も多く挙げられた子どもの変化は、「学習・授業に関するもの」であった。具体的な内容としては、「習い事が多い」授業中に立ち歩く」が多かった。

「習い事が多い」という変化に関しては、子ども達が通う学校の属性に起因する可能性がある。大学附属の学校に通っているということから、親も子どもも比較的教育に熱心であることが予想される。今回の調査対象となった学生は、大学附属以外の学校に通っていた者も多く、学校間での違いを、「子どもの変化」と捉えたのかもしれない。ただし、昨今、多くの習い事をする子どもと、全く習い事をしない子どもの二極分化が進んでいるとも言われ、「習い事が多い」という意見は、このような社会的変化を反映していることも考えられる。

また、「授業中に立ち歩く」という変化も多くあげられた。授業中にきちんと席へ座っていられない子どもが増えたことについては、教員からも挙げられることの多い子どもの変化である。このような変化は、「(小学校において、) 授業中に立ち歩きや私語、自己中心的な行動を取る児童によって学級全体の授業が成立しない現象」(尾木, 1999) と定義される「学級崩壊」という言葉を想起させる。「学級崩壊」と呼ぶまでに至らなくとも、多くの学校が子どもを席に座らせて授業を受けさせることにすら困難を覚え始めている。このような光景を、教育実習生は「子どもの変化」と捉えている。「個人特性に関するもの」でも、「幼い」「自己主張が強い」などが挙げられており、これらの子ども達を席へ座らせて授業を受けさせることの困難さを教育実習生は感じたことが予想される。

（2）小学5年・6年

小学5年・6年を担当した教育実習生によって、最も多く挙げられた子どもの変化は、「その他」であった。具体的な内容としては、「メール・PC・携帯電話を使いこなす」「掃除が下手」が挙げられていた。「メール・PC・携帯電話を使いこなす」という変化に関しては、現代の社会状況が大きく反映されているものと考えられる。1990年代半ばから若者の間では、ポケベル、PHS、携帯電話という変遷をたどりながら、コミュニケーション・ツールの流行が続いてきた。大人の持ち物であったコミュニケーション・ツールであるが、昨今では子ども達の間でも必需品になりつつある。このような変化が、教育実習生にとって「変化」と捉えられたようである。これらのコミュニケーション・ツールに関しては、防犯面での効用の他方で、トラブルが増加している事実もある。特に、子ども同士による中傷メールが後を絶たず、学校側は頭を悩ませていることも変化を感じさせるエピソードとして挙げられていた。

また、「その他」に次いで多く挙げられたものに「個人特性に関するもの」があった。具体的には、「自己主張ができる」「反抗しない、素直」の他、「思いやりがある」「大人っぽい」などの意見も挙げられていた。小学1年から4年生の場合と異なり、小学5・6年生を担当した教育実習生は、「子ども達が自分達の時よりも落ち着き、大人っぽくなった」と感じることが多かったようである。休み時間に「TVのアイドルを真似たダンスを踊る」、「芸能人への関心が高い」ことから「今の子どもは大人びた」と感じた教育実習生もいた。

ただし、他方で「甘えて抱きついてくる」「床に寝転ぶ」など「幼い」との指摘もあった。メディアの流布もあいまって子どもが大人の文化の影響を受ける様が「大人っぽくなった」と感じさせる一方で、「幼さ」も残り、その対比が両者を色濃く印象づけることになったと考えられる。このような「大人っぽさ」と「幼さ」の混在が小学５・６年生の特徴と言えるのではないだろうか。

（3）中学１年から３年

中学１年から３年生を担当した教育実習生からは、圧倒的に「学習・授業に関するもの」が多く挙げられた。具体的には「塾通いの増加」という変化である。高校受験を控え、中学生になると一気に塾通いが増加するという現象は、以前から見られたものである。しかし、近年の子ども達は「塾に通い、学校の授業よりも先を勉強している。学校の授業は、疲れて寝ている子が多く、勉強は塾でしている」という点で、自分達の頃とは変わったと感じたようである。先述の学級崩壊の煽りを受け、学校のあり方や存在が問われていることを反映した変化と言えるのではないだろうか。

２．今後の課題

調査の結果、様々な「子どもの変化」が抽出された。しかし、今回の調査は教育実習生がある学校で2週間の実習を行う中で感じた変化であり、各人の個人経験や、考え方、実習での子どもとの関わり方や学校風土の特色などが影響を及ぼしていることが考えられる。例えば、「習い事が多い」などの特徴に関しては、実習先が附属学校であったことに起因している可能性があり、「男女仲が良い」「男女仲が悪い」、「グループ化」「グループがない」など、相反する特徴が変化として挙げられていることについては、最近の子どもの特徴というよりも、クラス作りなどの変数が関与している可能性がある。今回の調査結果をそのまま最近の子どもの変化として一般化することにはやや無理があるかもしれない。

しかしながら、得られた知見が、現代における子どもの変化の一端を映し出しているのも事実である。調査結果を大まかにまとめるならば、対人関係面での不器用さ、食への関心の薄れ、習い事・塾への傾倒と学校の授業に対する意識の薄れ、幼さと大人っぽさの同居、言葉遣いの悪さ、PC・メール・携帯電話電話の一般化などに集約することができる。尾山・杉山（2003）は子どもの人間関係についての教師の意識を調査したが、そこでも子どもの「無関心・自己中心的な態度」「言葉・態度のコミュニケーション不足」などが挙げられており、今回の調査結果と一致する。子ども達がいかに変化したのかを考えることは、今後の教育現場にとっても有用であり、教育実習生がこのような子どもの変化を捉えたことは興味深い。子どもの変化は、現代の若者にも通じるものであり、それは現代の大人、ひいては社会にも通じるものである。子ども達の変化を見過ごさず、現代の社会の考えるべき課題として捉えていくことが重要であると思われる。

【文献】

榎本博明（2001）「自己チューな子」の心理と行動.　児童心理　12月号　1－10.
門脇厚司（1999）子どもの社会力.　岩波書店.
尾木直樹（1999）「学級崩壊」をどうみるか.　日本放送出版協会.

尾山尚江・杉山緑（2003）子どもの人間関係についての教師の意識に関する調査研究.
山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第16号　79－91.
末田恵子・大石英史（2003）今の教員は何にストレスを感じているか？　－アンケート調査を踏まえて－.　山口大学教育学部研究論叢.　第53巻第３部　23－33.
玉井香代子・大石英史（2003）現代の中学生像についての一考察　－アンケート調査を踏まえて－.　山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第16号　101－110.